# 日本新帰化植物ミズヒマワリ Gymnocoronis spilanthoides DC.


| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2019-09-09<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 須山, 知香, Suyama, Chika<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.24517/00055403 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

# 須山知香：日本新帰化植物ミズヒマワリ *Gymnocoronis spilanthoides* DC.

Chika Suyama : A new naturalized plant, *Gymnocoronis spilanthoides* DC., in Japan

ミズヒマワリ *Gymnocoronis spilanthoides* DC. は，中南米に分布するキク科ヒヨドリバナ連の多年草である。この植物が，愛知県豊橋市内の河川に数年間継続して生育するのを確認したので，報告する。本報は，ミズヒマワリの日本国内における最初の帰化報告である。

著者は，1995 年 10 月，愛知県豊橋市内の野外調査中に，見慣れない植物を発見した。この植物は河川の氾濫原や水際で旺盛に生育していた（Fig. 1）。花の形態（Fig. 2）から，キク科ヒヨドリバナ連のヌマダイコン属か，その近縁属の植物であろうと考えたが，国内の野生植物図鑑類及び園芸植物図鑑類での同定は不可能であった。生育状況を続けて観察したところ，水中においても長期間生育していることから，この植物は熱帯魚店などで市販されている観賞用の水草ではないかと思い至った。そこで観賞用水草類の図書類を調べたところ，その中の「ミズヒマワリ」の呼び名で掲載されているものと酷似していた。学名には *Gymnocoronis spilanthoides* DC. が用いられていた。*Gymnocoronis* 属は世界で 5 種が知られている（Cook 1990）。豊橋で確認したこの水草を，海外の図鑑類の記述（Cook 1990 ; de Wit 1990）と比較した結果，*G. spilanthoides* でよいことが判明した。本植物は中南米原産で，熱帯魚と共に飼育する観賞用の水草として，国内外で広く販売されている（小林 1993）。

豊橋市内およびその周辺地域での分布生育状況を調べたところ，1996 年時点では，豊橋市内の梅田川とその一支流にのみ帰化していた。本植物の散布は種子によるとされている（Cook 1990）。豊橋においても毎年 6–11 月の長期にわたり盛んに開花しているが，今のところ種子は全く確認していない。この植物がすでに帰化しているオーストラリアの Australian Association of Bush Regenerators（NSW）AABR Inc. では，実験の結果，種子の稔性は 1% 未満であることをインターネットのホームページで報告している（http : //www.zip.com.au/~aabr/news/regional_news/qld/qld 02.html）。また，ちぎれた茎は節から盛んに側枝や根を出し，短期間で大きなコロニーへと成長する。これらのことから，豊橋市におけるミズヒマワリの帰化は，近隣での栽培品が逸出したことによるものと思われる。

Fig. 1. *Gymnocoronis spilanthoides* growing on the riverside, Toyohashi, Aichi Pref.

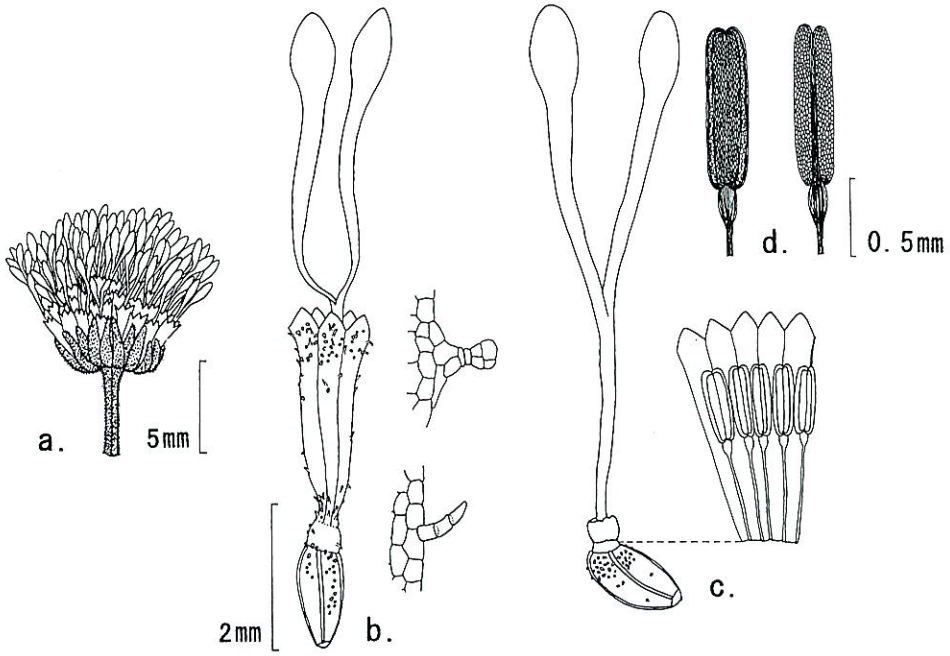


Fig. 2. Flower of *Gymnocoronis spilanthoides*. a, capitulum ; b, floret and their trichomes ; c, floret (corolla removed) and its inner side view of corolla ; d, anther.

ミズヒマワリは，すでにオーストラリア，ニュージーランドの各地へ帰化し，アジア地域では数年前より台湾に帰化している（林 2000）。これらの国では，ミズヒマワリは一度野外で定着すると，同じ場所に生育する在来植物を駆逐してしまうほど旺盛に増殖するため，本植物に対して“pest plants”, “noxious plants”等の「とても有害な植物」という呼称を用いている。今後国内において，本植物の生育地での増減や分布拡大の有無について，十分な注意を要すると考える。

本植物が国内へ帰化した記録として，標本を金沢大学理学部標本庫（KANA），豊橋市自然史博物館植物標本庫（TMNH-B）に保管する。

## 謝辞

この報告を纏めるにあたり，分布と分類に関して神戸大学の角野康郎教授，九州大学の矢原徹一教授，神奈川県立生命の星・地球博物館の勝山輝男主任研究員にご指導ご助言をいただいた。また，豊橋市とその周辺での生育情報について多くの方々から有意義なコメントを頂戴した。ここに記して御礼申し上げます。

## 引用文献

Cook, C. D. K. 1990. Aquatic plant book. p. 55, fig. 72. SPB Academic Publishing, Hague.

de Wit, H. C. D. 1990. Aquarienpflanzen Zweite, üeberarbeitete und neugestaltete Auflage. pp. 388–389, photo 98. Verlag Eugen Ulmer, Stuttgart.

小林道信．1993．アクアリウム・シリーズ　ザ・水草．127 pp．誠文堂新光社，東京．

林　春吉．2000．台湾水生植物自然観察図鑑．p. 178．田野影像出版社，台北．

（〒920-1192　金沢市角間町　金沢大学大学院自然科学科植物自然史研究室　Laboratory for Plant Natural History, Graduate School of Natural Sciences, Kanazawa University, Kakuma, Kanazawa 920-1192, Japan）